

総合人文科学研究センター研究部門
現代社会における「想像力」の総合的研究

2019年度第2回研究会の報告

日時：2019年6月21日（金）18時30分から20時45分

会場：戸山キャンパス33号館16階、第10会議室

第2回研究会は、「占領下における『純血／純潔』と優生学的想像力」をテーマとして開催された。報告者は二名であり、第一報告者の竹内愛子氏（招聘研究員）が「遺伝共同体の想像力：ABCCによる近親交配研究」という題目で、第二報告者の豊田真穂氏（本学教授）が「『敗戦』を迎える想像力：純潔／純血を求めて」という題目で、研究発表を行った。今回の研究会には学外から多くの研究者が参加され、20名ほどの参会者によって活発な意見が交換された。（御子柴善之記）

第1報告の竹内愛子は、戦後占領期に米国政府から広島・長崎に派遣された原爆傷害調査委員会（Atomic Bomb Casualty Commission: ABCC）による研究が、被爆の人体における後遺症研究から始まり、「近親交配研究」へと発展していった過程を発表した。ABCCの遺伝学チームの米国科学者たちが、当時の世界における遺伝学の先端を担っていたと同時に、戦前の優生学からの延長で人類の進化論的視点を基盤としていたことを明らかにした。特に遺伝チームのリーダーのジェームズ・ニールは、ABCCを去った後もABCC時代から得ていたアメリカ原子力委員会からの資金を利用し、人類遺伝学、特に集団遺伝子の研究を続けた。その中でも南米先住民を対象とした研究は、被験者とのインフォームド・コンセントの欠如、「サバルタン」の搾取、国際的な南北関係といった、ABCCの研究の倫理的な問題と共通した問題点が後にニールの没後（2000年以降）に浮上し、人類学者の間で大論争を呼んだことも紹介した。

原爆研究者を含め学内外からの参加者が集まり、なぜABCCのような研究が戦後日本で可能であったかという議論を熱く交わした。当時の「優生学」の意味（日米では異なる意味）、被爆者に「治療」を与えないというABCCの立場などといった内容を議論した。また、本報告の「想像力」との関わりという質問も挙がった。報告者は、ABCC科学者が「想像」した人類における遺伝子共同体や人類の遺伝的未来を説明したが、参加者の中からは、逆にABCCによる「想像力の欠如」（シンパシーの欠如）といった見方も挙がった。（竹内愛子先生記）

第2報告の豊田真穂は、「敗戦」を迎えた日本が、「引揚者」と「占領軍」を迎える対策をそれぞれ講じた際に、特に日本の純潔／純血を守るため、旧植民地や日本国内で占領軍兵士との間の子を妊娠した女性の身体に注目したこと、前者は「特殊婦人」、後者は「パンパン」として知られているが、両者ともに「性病」や「混血児」をもたらすと危険視され日本政府が早急な対応を試みたことを説明した。とりわけ、それらの対策を立案する際に、女性身体や兵士をめぐるどのような想像力があったのかを具体的にみていった。

質疑では、「民族の純潔」という場合の「民族」が何をさすのか、また当時の想像と実態のズレを理解する際の「想像力」などが論点となった。更に「戦時性暴力」という大きな枠組みで理解することで、植民地支配の道具としての性暴力と民族の「血のコントロール」という側面に注目できるという新たな視点も加わり有意義な議論が展開された。（豊田真穂先生記）